# 育児期の父母における家庭と仕事の関連 --インタビュー調査を通して--

伊藤 里菜\*·池田 浩之\*\*

本研究では、育児期の父母の仕事・家庭間のポジティブな影響に焦点を当て、その質的な実態を明らかにすることを目的とし、就学前の子どもを持ち、就労している男女6名(男性3名、女性3名:平均年齢34.0歳)を対象とした質問紙調査およびインタビュー調査を実施した。

仕事観, 仕事と家庭の多重役割のスピルオーバー, GHQ30, 主観的幸福感を測定し, 家庭と仕事でのやりがいや大変なことについてインタビュー調査を実施した。その結果, 男性では仕事, 女性では家庭に重きを置いて生活していることが伺えた。また, 短時間勤務をしている女性において, 家庭から仕事へのネガティブ・スピルオーバー, 仕事から家庭への補償の得点が高く, 家庭でのネガティブな状況を仕事で埋め合わせる傾向があることが示された。さらに, 家庭での感謝についての言及から, 家庭で配偶者から受ける感謝が, 育児期の父母における家庭と仕事の両立において鍵となる可能性が示唆された。

キーワード:スピルオーバー・補償・育児期・主観的幸福感

#### 序論

#### 日本における多重役割の現状

近年日本では、共働き世帯数が年々増加している(内閣府、2017)。また、第1子出産前後に女性が就業を継続する割合は右肩上がりとなっている(内閣府、2017)。このように、多くの人が母、妻、労働者といった複数の役割を持ち、多重役割を担っている。内閣府(2012)によると、仕事と生活のバランス確保が幸福感を高めると回答している人は半数に上り、仕事と生活のバランスを重要視する人は多い。しかし子どもの体調不良時に妻も夫も重要な仕事があり、休みにくかったと回答した者は79.5%にも上り(久保、2012)、多重役割による困難があることがうかがえる。このような状況を克服するため、さらなる研究が望まれる。

### 多重役割に関する代表的モデル

役割間の関係を捉える枠組みの代表的モデルと して、一方の役割における状況や経験が、他方の 役割における状況や経験にも影響を及ぼすとする「スピルオーバー(流出)」,一方の役割での不満を他方の役割での満足により埋め合わせるとする「補償」,仕事役割と家庭役割の間で役割間葛藤が生じるとする「コンフリクト(葛藤)」,両方の役割が独立しているとする「分離」が挙げられる(福丸,2001)。このように4つのモデルがあるが,先行研究では多重役割のネガティブな影響について扱ったものが多い(小堀,2010;小泉・菅原・北村,2001など)。本研究では,特に仕事と家庭を両立することのポジティブな面に着目し,スピルオーバーと補償の2つを取り上げる。

#### 精神的健康度との関連

先行研究では多重役割と精神的健康度の関連が 指摘されており、共働き世帯の母親では、仕事・ 家庭間のポジティブ・スピルオーバーが抑うつ度 を低減すること(福丸, 2001)などが明らかにさ れている。また、家庭役割から仕事役割への補償 は父母ともに心理的健康度の高さと関連している ということも示されている(福丸・小泉, 2003)。

## 夫婦間での関連と差異

前述したのは、個人内での役割間の関係である。

<sup>\*</sup> 兵庫教育大学大学院学校教育研究科

<sup>\*\*</sup> 兵庫教育大学発達心理臨床研究センター

また先行研究では夫婦間での関連も指摘されている。例えば、仕事と家庭の両立のネガティブな面・ポジティブな面の双方が夫婦間で関連すること (黒澤, 2011) が示されている。

さらに、夫婦間では影響を与えるだけでなく、その差異も見られ、夫よりも妻の方がネガティブ・スピルオーバー、ポジティブ・スピルオーバーを強く認知していることが示されている(福丸、2001)。ここから、個人内の関係だけでなく、夫婦間での関連や差異についても見ていく必要があると思われる。

以上より本研究では、家庭と仕事という役割間 のポジティブな影響を、尺度を用いて測定すると ともに、インタビュー調査によって、育児期の子 どもを持ちながら就労している人の質的な実態を 明らかにすることを目的とする。

## 方法

被調査者と実施時期 就学前の子どもを持ち,就 労している男女6名を対象とし,2017年9月から 2018年1月にかけて実施した。

手続き 縁故法により、調査対象者となる男女6名を選定した。調査は調査者の通う大学内の教室、被調査者の職場の面談室といった、静かな部屋で実施した。初めに質問紙への記入を求め、その後30分程度の半構造化面接を実施した。

## 調査項目

質問紙 1. フェイスシート 2. スピルオーバー 尺度<sup>1</sup> (福丸, 2001) 3. 主観的幸福感尺度<sup>4</sup> (伊藤・相良・池田・川浦, 2003) 4. スピルオーバー 尺度<sup>2</sup> (小泉・福丸・中山・無藤, 2007) 5. 仕 事観尺度<sup>3</sup> (福丸・無藤・飯長, 1999) 6. The General Health Questionnaire 30項目版(以下, GHQ30)<sup>5</sup> (大坊・中川, 1985, 1996)

(※上付きの数字 12345 は表1と対応)

インタビュー調査 初めにフェイスシートを見ながら、家族構成や配偶者について聞き取り、その後仕事や家庭、その両立について質問をした。質問をしていく中で気になった点についてはさらに詳しく聞いた。質問項目は以下の通りであった。

1. 仕事できつい・大変だと思うのはどんなときか。2. 仕事で疲れたときやきついときに、どのように対処しているか。3. 仕事で楽しいと思う・やりがいを感じるのはどんなときか。4. 家庭できつい・大変だと思うのはどんなときか。5. 家庭のことで疲れたときやきついとき、どのように対処しているか。6. 家庭で楽しいと思う・やりがいを感じるのはどんなときか。7. 仕事と家庭の両立で、大変だと思うのはどんなときか。8. 仕事と家庭の両立で、大変なときにはどのように対処しているか。9. 仕事と家庭の両立をしていて、よかったと感じるのはどんなときか。

倫理的配慮 調査の概要と目的,回答は自由意志 に基づくものであり、中止可能であること,調査 内容は研究にのみ使用し、個人が特定されるかた ちで発表されることはないこと等を記した書類を 事前に配布し、同意が得られた者に調査を実施し た。

#### 結果と考察

6名の調査対象者の平均年齢は34.0歳(年齢範囲28-42歳)であった。子どもの人数は平均2.0人、末子年齢は平均1.5歳であった。調査対象者の配偶者は全員就労していたが、2名は育休中であった。調査対象者のうち5名は常勤、1名は非常勤であった。調査対象者の週の就労時間は平均42.9時間であり。最も少ない者で15時間、最も多い者で80時間であった。

尺度得点の素点を表1に示す。表1より、スピルオーバー尺度について、仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバー、仕事役割から家庭役割へのネガティブ・スピルオーバーにおいて男性の方が女性よりも得点が高かった。先行研究(福丸、2000)では男性よりも女性の方がネガティブ・スピルオーバーともに多く感じるとされているが、今回の調査ではそのような傾向はみられなかった。しかし、福丸・中山ら(2006)では過重労働が仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバーと関連することが示されているため、就労時間の長い男性において

先行研究 先行研究 充実・自己実現高. 充実・自己実現低 全体平均 男性平均 女性平均 女性 制約・負担低群 制約・負担高群 性別 男性 女性 女性 男性 女性 男性 スピルオーパー尺度(福丸, 2001)1 家庭役割から仕事役割へのネガティブ・スピルオーバー 2.83 2.67 4.33 2.83 3.00 1.33 2.83 2.33 1.99 3.33 2.38 3.58 2.28 両役割間のポジティブ・スピルオーバー 4.83 3.17 4.00 3.33 4.83 4.33 4.08 4.17 3.21 4.00 3.54 4.42 3.61 仕事役割から家庭役割へのネガティブ・スピルオーバー 2.67 3.00 3.00 4.33 2.00 3.67 3.11 3.56 3.00 2.67 2.94 2.83 3.67 スピルオーパー尺度(小泉·福丸·中山·無藤, 2007)2 家庭から仕事へのポジティブ・スピルオーバー 5.00 3.57 4.14 2.86 4.86 4.57 4.17 4.14 3.50 4.19 3.56 4.57 3.67 什事から家庭への補償 2.55 4.60 3.40 5.00 2.00 4.00 3.00 3.67 3.20 2.05 4.13 4.80 2.80 家庭から仕事への補償 5.00 3 00 4 40 4 00 4 60 3 60 4 10 4 20 377 4 00 3 99 4 70 3 53 仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバー 3.67 2.17 3.00 3.61 3.83 2.33 4.17 3.19 3.67 2.87 2.72 2.8 3.00 家庭から仕事へのネガティブ・スピルオーバー 3.33 3.17 3.50 3.00 3.67 4.00 3.44 3.44 2.30 3.44 2.38 3.42 3.39 仕事から家庭へのポジティブ・スピルオーバー 5.00 4.00 2.75 2.75 5.00 3.25 3.79 3.67 1.95 3.92 4.12 3.88 3.33 仕事観尺度(福丸·無藤·飯長, 1999)<sup>8</sup> 充実·自己実現 3.67 2.78 3.33 2.78 3.00 3.00 3.09 3.15 3.04 3.50 2.85 制約·負担 1.75 2.00 2.00 1.96 2.00 1.92 1.63 2.17 1.50 2.00 2.50 仕事中心 2.33 2.00 2.33 1.33 1.00 1.67 1.78 1.78 1.78 2.33 1.67 経済的手段·義務 3.17 3.08 4.00 2.75 3.00 3.75 3.75 2.75 3.33 3.50 3.50 主観的幸福感尺度(伊藤・相良・池田・川浦, 2003)4 35.24 37.33 34.85 40.00 36.67 43.00 33.00 37.00 42.00 42.00 35.00 38.67 40.00

5.50

1.67

1.00 4.00 9.00 0.00 15.00 4.00

表 1 尺度得点と先行研究の得点

※スピルオーバー尺度(小泉・福丸・中山・無藤, 2007)の『先行研究女性』の得点は常勤就労をしている者の平均を記載

9.33

5.00

2.67

仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバーが 高くなったと考えられた。

GHQ30<sup>5</sup>

反対に、仕事から家庭への補償では男性よりも 女性の方が得点が高かった。インタビュー調査で は、女性においては「子どもとの世界ばっかりだ とちょっとしんどい(ID2)」など、家庭で長時 間過ごすことへのネガティブな語りがみられたが、 男性においては「子どもたちと一緒に過ごせるの はとても幸せ(ID1)」など、家庭にいること自 体が楽しいといったポジティブな語りが目立った ことから、女性では家庭のストレスを仕事に行く ことで発散することがあるが、男性においてはそ のようなことは少ないのかもしれない。インタ ビュー調査の結果については、後程詳しく記載す る。

続いて、仕事観尺度において、充実・自己実現と制約・負担の得点より、被調査者を充実・自己 実現高、制約・負担低群と充実・自己実現低、制 約・負担高群の2群に分類した。充実・自己実現高、 制約・負担低群は2名(ID1,3)充実・自己実現低、 制約・負担高群は3名(ID2,4,6)であった(ID5 は充実・自己実現低、制約・負担高群に分類可能 だが平均に近いため分類しなかった)。群ごとに みると(表1)、両役割間のポジティブ・スピルオー バー、家庭から仕事へのポジティブ・スピルオー バー、仕事から家庭へのポジティブ・スピルオー バー, 仕事から家庭への補償, 家庭から仕事への 補償では充実・自己実現高、制約・負担低群のほ うが得点が高かった。ここから、仕事が充実して おり、自己実現となると考えていて、負担や制約 をそれほど感じていない人では、そうでない人よ りも仕事・家庭間のポジティブな影響を多分に感 じているということが考えられた。家庭から仕事、 仕事から家庭というどちらの方向性においても得 点が高かったことから、仕事と家庭が密接に関連 しているということが分かる。本調査では仕事観 がスピルオーバーや補償に影響しているのか、ス ピルオーバーや補償により肯定的な仕事観を持つ ことができるのかという方向性は明らかにするこ とができないが、仕事・家庭間のポジティブな影 響が多い人では、仕事を肯定的に捉えていること が明らかとなった。

一方精神的健康度については、主観的幸福感、GHQ30ともに自己実現高、制約・負担低群のほうが高いという結果となった。主観的幸福感は高いほど、GHQ30は低いほど、健康度が高いことを示す。当初は充実・自己実現高、制約・負担低群のほうが仕事を肯定的に捉えており、精神的健

康度が高いのではないかと考えていたが、仕事観によるはっきりとした違いはみられなかった。その要因として、本研究では調査対象者が6名と少なく、1人の得点により平均点が大きく変わってしまうことが考えられる。例えば、ID4は充実・自己実現低、制約・負担高群であるが、GHQ30は0点と極端に低い。自分の精神的、身体的な不調に気づいていない、もしくは考えないようにしている可能性も考えられるため、得点と実際の状態が一致していないということもあり得る。そういったことにも留意しつつ、健康度については解釈する必要があると思われた。

また、インタビュー調査において、仕事で大変なことについて「しょうがない」と受け止める発言(ID1,3)がみられたことから、客観的に見た実際の負担は大きいものの、仕事をしなくてはならないことであると割り切って考えることで、仕事観が肯定的なものとなっていることも考えられる。今後、仕事観と健康度の関連についても十分に調査する必要があると思われた。

続いて男女間で得点を比較すると(表1),主 観的幸福感では女性の方が、GHQ30では男性の 方が得点が低く、男性の方が精神的に健康である ことが示された。伊藤・相良ら(2003)では主 観的幸福感に男女差はみられなかったため、先行 研究とは異なる傾向が示された。本調査ではID3, ID5のGHQ30の得点が他の調査対象者と比較して かなり高いため、その2名によって女性の平均点 が高くなっていると思われる。この2名は就労時 間を調整して育児・家事を行っていることから、 育児や家事による肉体的・精神的な疲労があるの かもしれない。パートタイム就労をしている母親 では、フルタイム就労をしている母親よりも育児 関連ストレスが高いことが示されているが(初塚・ 石田、1996)、本研究においても同様の傾向がみ られた。

続いて、先行研究の得点と本調査の得点を比較すると(表1)、本研究の調査対象者のほうが男女ともに両役割間のポジティブ・スピルオーバーの得点が高かった。小泉・福丸ら(2007)の尺

度で見ると、仕事から家庭へのポジティブ・スピルオーバーでは先行研究よりも得点が低いが、家庭から仕事へのポジティブ・スピルオーバーでは先行研究よりも得点が高い。ここから、家庭から仕事へのポジティブ・スピルオーバーの高さが両役割間のポジティブ・スピルオーバーの高い得点に結びついていると思われる。

また、女性において、双方の尺度で家庭から仕 事へのネガティブ・スピルオーバーの得点が高 かった。仕事から家庭への補償の得点も高いこと から, 本調査の対象者では, 家庭から仕事へのネ ガティブな影響を多く認識しており、仕事は家庭 におけるネガティブな影響を埋め合わせるものと して機能していると思われる。仕事から家庭への 補償の得点が高い要因として, 本調査で回答した 女性では育児のため仕事の時間を短縮している者 が3名中2名であったことが挙げられる。個々の 得点をみていくと(表1),女性(ID2,3,5)のう ち仕事から家庭への補償の得点が高いのはID3, 5の2名である。この2人は仕事の時間を短縮して おり、仕事の内容も事務等に制限されている。 イ ンタビュー調査においても2名とも、仕事の内容 自体は大変ではないという主旨の発言があったこ とから、仕事の内容や時間を調整し、仕事自体が 負担にならない働き方を選択しているといえる。 そのため、仕事に行くことで気持ちを切り替えら れるといったポジティブな面を認識しやすいので はないだろうか。ここから、仕事から家庭への補 償の高さは、働き方を自分で選択し、変更できる 場合に高まるのではないかと思われる。そのため、 非常勤勤務やパートなどでは仕事から家庭への補 償が高くなるのではないかと予想される。しかし、 家庭との兼ね合いで働き方を選択するには、働い ている会社の環境が大きく影響する。就労時間や 職務内容について柔軟な選択ができず、望まない 働き方を続けざるを得ない場合には、仕事から家 庭への補償の得点は下がることが予想される。非 常勤勤務やパートであったとしても、本人は辞め たいが辞められない場合, 本当は就労したくはな いが、家計のために就労せざるを得ない場合があ

| ID1男性   | ID2女性   | ID3女性 仕事できつい・大変だ   | ID4男性<br>と思うのはどんなときか   | ID5女性   | ID6男性  |
|---|---|--|--|---|--|
| 「保護者の協力を得られないとき」「同僚の<br>先生同士が、うまくいっていないとか協力を<br>得られないとき」  | 「支援上ですごいつまづいたときとか、個人<br>だときとか」「なかなかうまいこと、就労に向<br>けていけなかったりとか、どうやったらこの人<br>は就労いけるのかなあって個んでも、なかな<br>かうまくいかなかったりとか」  | 「仕事の内容がきついっていうのは全然ない<br>(中略)仕事の量が、他の人よりもちょっと負<br>担軽かったりとか、早く上がらせてもらってた<br>りとかするの、そのあたりのなんだろうな、申  | 「まあ人相手の仕事なんで、いつどこで何が<br>起こるか分からへんので、大変っちゃ大変<br>やし、(はい)急な対応とかがね。どうしても<br>出てくるんで、そのときはやのば大変やし(中路)まあでも基本毎日大変です」「まあちょっ<br>と人足らんかなっていう気はしてます」                                       | 「お仕事自体はほんとになんていうか、私の<br>ベースでやらしてもらってて、今のところきつ<br>いたかがない「切り替えができないってこと<br>が多かったですね。まあ子どもとかができ<br>て、なんか生活、に一生懸命になるともう考<br>えてる間もないので、子どもがいないとき、<br>はもうずっとこうなんか考えてるってことが多<br>かった」   | 「精神的にやったらやっぱりこう、クレームが<br>続いたら大変がな」「彼女たち(後輩のスタッ<br>力が悩んであるなか聞だ。ちょっと可様<br>らんとなと思ったりは、します」「肉体的には<br>(中略) 一日に柱ら社ぐらい企業の方を回っ<br>て、いかないといけないとかいうことと、最近<br>それはまた彼れるようになってきましたね」  |
| 「折衷案で、こうやりましょねっていう、どっち。<br>かというと、その意見に対してどうこうとか。<br>くて、その人のメンタリティーのところを拾っ<br>て、でうまくいきましょねってしてるかな」「保<br>護者の感情の部分を同したっこう格って始ってって感じ」「対保護者とか対生徒の<br>ときは、それを機場というか職員室で、ああ<br>だったこうだったってのはもう言う。ためず<br>に、て家でも言う(中略)でまあしようがない<br>なっているうとで対しまるのと | 「上司に相談。まあ他のスタッフにも相談」<br>「ストレス発散みたいな。飲み、みたいなとこ<br>ろもあるかもしれない」張るとか」家でゆっ<br>くりぼーっとするというか、自分の好きなマン<br>力読んだりとか」  | 「まあこれがずっと続くわけではなくって、ま<br>あその、まあもうちょっと子どもが長く預けら<br>れるようになって、まあフルタイムというか。6<br>時までの勤務に戻せるようになったら、まあ<br>もうちょっと責めまできるかなっていらので、切り替えるようにはしてますね」「今だけだから<br>まあしょうがないなって思うようにしてます」   | 「まあ人に頼んだり。人に頼むか、優先順位、整理して、(はい)後に回せるもんは後に回して」   | 「とにかく土日でよく寝る」「もう子どもに集中<br>しないともうちょっともう考えてる間もないの<br>で、逆にちょっとその面では助けられてるか<br>な」   | 「豪婦って、風呂入るやろ、ゆっくり風呂入<br>る」「体操みたいな合気追参って、それを、鬼<br>さんと一緒に始めて子どもたちと一緒に、そ<br>れでちょっとリフレッシュしたりはしてます」<br>「始示の友人と飲みにつたりすることが多<br>いかは」「直接的にその仕事の個みみたいな<br>ことを言うわけではないんやけど、なんか<br>ね、大変やわとか言ってるだけで救われると<br>いうか」   |
| 「自分の意図通りに仕事が進む、生徒がうまく<br>するとか授業が進むとか、それは同僚とかもそ<br>うだけど、こうなったらいいなと思って半備した<br>ヤッカその通りいったときは、やりがいという<br>か、これはうまくいったよっしゃーという感じに」  | なこと言われるとすごい良かったりとかって  | 【事で楽しいと思う・やりが<br>で思います(中部)スタッフからありがとう<br>で思います(中部)スタッフからありがとうと<br>か言ってもらえると、おあまる社できか役<br>に立ってるのかなっていう風には思えます」<br>「(0.家での感謝と会社での感謝の違いは、<br>大はありがとうとは言ってくれるんですけど、<br>(中部)気温いみたいなのが、やっぱり多少<br>は(中略)凝ったというかからに必じなかで<br>すけど、こで仕事をしてるとれ互いこう<br>ちょっと気温いあったりとか、そのあたりを、<br>結構みんなしてくれるなっていう感じがある<br>ので、(中略)報かいことでも条例でいて感謝を<br>伝えてくれるっていうのがすごくいいなと思<br>いますね。夫は結構を、鈍いというか気づ<br>かないので、(はい)言ってほというか気づ<br>かないので、(はい)言ってほというか気づ<br>ところより加ーされたりとかするので、その<br>あたりの違い! | 「人が相手なので、人が、自分のかかわりで<br>どんどんこう変化していくというか、変ってい<br>くので、そういう部かが目に見えたときはよ<br>しって思うし、ましてやここは就職をサポート<br>してるところなので、1人の人が就場上ととき<br>にはよしってなりますし」「個人的にっていう<br>よりは、まあ全負でよかったなって思える感<br>じ」 | 「(メンバーさんの)変化がすごい、すごいな<br>あと自分自身も、自分自身がほんとに成長<br>させてもらえるお仕事なのですごいいいなあ<br>と思います」  | 「べたやけどありがとうって言われたときかな」「利用者さんやスタップに)ここ私のあれ、 建動だ。 みたいなのみ、 建動だ。 みたいなことを 気づいてもらって前向きになってもらう。 なってもらったらとかいう。 やったらすごいやりがい感じます。「反対に関が気づかされるっていうこともすごい、やりがいのつかな」「何気ない会話とかれ、たぐるんあるので、まあそういうときにこうおもしろい話とかしてもらえたら楽しいなって思います」   |
| 「やっぱ仕事と家庭の時間かな」「家で過ご<br>す時間を生み出すのは難しい」「それこそ・週<br>間、子どもらが寝てる間に出て、で帰ってくる<br>のは寝てから帰るとかになることがあって、<br>ある」「育児で大変なのは、うーん、子どもが<br>から近くできたとは、男しなどうこもなら<br>ないことがあるなと思う」「家庭で自分がこれ<br>は難しいなっていうのはそんなにないかな」<br>は難しいなっていうのはそんなにないかな」                 |   | 「子どもの生活リズムに合わせるので、(は<br>い)自分のペースで生活、できないっていう<br>のは結構しんだいなって思うことがあります。<br>方は仕事で忙しくて、あんまりね。夜も9時く<br>らいに帰ってくるのでそれまでの間はすっと<br>私で、1人でやらないといけないし、「後事や<br>くらいですかね」「やらないといけないことを<br>時間とがこうきょうとせもがあってくると、<br>ちょっと余裕がなくなってきたりとかして、ま<br>あちょっとストレカがまったり、   | 思うようにいけへんときとか」   | 「家庭では、やっぱり家事が、まあ日々の。<br>日々こなしていかないと、自分が風邪では<br>ぐらい寝込んだもう手が付けれないでもい<br>山盛りになっているっていう状態が、それを<br>こう日々コンスタントにこなしていくっていう<br>のがきついですね」「娘が嬢だと言うので寝<br>かしつけを夫に親かず)寒るときぐらい、ババ<br>いってくれよっていう。ちょっと辛いです」  | 「養力た身体奮」起こして(水仕事を)やるのは大変がなあ。だら一つとしたいところをやらななたか思ってやるのは大変、やけども、まあ今始めたばっかりやから異さんまだ感情、なくれるんで、そこまだ頑張れるかな。これが当たり前になってきたと結構しんといやうなかとか思います。 J 解神的によっなないし、あの…安っぽいかもしらんけど、いいことしてるみたいな感覚。   |
| 「どないもできへんなあっていう感じ。そこは<br>もう臭さんに、理解してねっていうのをお願<br>いするしかないね」「仕事の調整をするか<br>な、で、最優先、なんていうの、削れる部分<br>を削って時間を当てる」   | 「愚痴るしかないですね」「近所の人にもよく<br>愚痴ってます」  | たりとかはできますし、仕事がない日も、もう<br>どうしてもちょっとしんどかったらその場を離<br>れてちょっと落ち着いたりとか」  | 「お菓子で釣ったり。か、もう、なんか物で<br>釣ってる気はするなあ。よく、かもう度が言っ<br>て無理やったら嫁に言ってもらってみたいな<br>感じ」「しゃあないなって」   | 「自分を抑制して、非あ変わってもらえるよう<br>に自分を基ず変えようっていう努力をして、<br>が顕示しても、っていうところでかねく笑)<br>なんか予察でで思ったらその人(合気温の<br>先生)に相談したりとか、まる無のはがいる。<br>も様記所に住んでて仲いいので、その<br>人に相談したりとかり「たまに、体みの目とか<br>は、一部におばあちゃんがいて、仲略)上<br>の子を一部に行ってこーいて言って送り<br>に、ちょとな楽な時間を過ごすというか」           | 「自分がほんまどうしてもしんどかったときは、(妻に)お願いする。 ごめんねーって言って」   |
| 「家族で過ごす時間はとってもとっても大事<br>だなって思う。今なんかは、家な話、3月まで<br>は仕事とのパランパめっちゃ健しくて、仕<br>事が8。9で家庭が1くらいのところが、今は<br>だいぶゆくりなせまでかか。例えば朝と<br>か、夕ご飯も家族で食べれる。子どもたちと<br>一緒に過ごせるのはとても幸せ」  | 「子どもにやっぱり、いろいろと成長してできるところとかが増えて来たりとか、するのを<br>るところとかが増えて来たりとか、するのを<br>見るのはやっぱり、親としては難しい「子ど<br>もが寝た後の、1人で飲むお酒とか、たまっ<br>てたドラマを見るときとかは、1人でちょっと<br>ほっこりします」                                    | コミュアーションが最近取れるようになって<br>きたので、ちょうと会話して、楽しんだりとか、<br>「日に日に言葉どんどん覚えていって、いろ<br>んな会話ができるようになったりすると、まあ<br>成長を感じますし」   | 「見てるだけでね。楽しいですから、はい、ま<br>あ一緒におれたらそれでいいかなあ。(中<br>略)関われてるのが一番いいかなって思い<br>ます) 百男につりがしとかあるかな」「普<br>段のかかわりが、かなとは思いますかね」   | 「自分の家が居心地がいいように、手を加え<br>ていべっていうのが楽しい、プラス、あとはあ<br>の中略り出いり笑色楽しんでます」「な<br>かかきれいになったり整ったりすることが多<br>やりがいなかなと思います」「育児は<br>もうやりがいしかないっていう思いなんです<br>けど(笑)(中略)接し方を変えると、子どもも<br>安定する、子ともが落ち着くっていうのを実<br>感してて、そこのすこい、自分も成長できる<br>し、子どもの変化も見れて難しいなと」          | 「楽しいよね、家おんの。(中略)おるだけや<br>で、安心するし、話聞いてるだけで、幸せや<br>なかと思うし」付き、楽しいのはからば会話<br>かな近く先も一般した。近日にようにしてど<br>人な友達があるとか聞いたりはしてちょっと<br>した。成長を感じたりとか「夫婦では、子ど<br>たちを変かしてから、日時から「2時は二人の<br>時間にしてて、(中略)ちょっとしゃべるみた<br>がいは美さんの感謝(中略)それで畏さんが<br>機能になったらそりゃ「番ええわなあ」「育み<br>のやりがいか、まるこれも気です。よれ<br>分自身のね。やっぱ子ども…から数えてもら<br>うきとのできない。  |
| 「両立が難しいってのは、いや、特にないか<br>な。(中略) 現場にいてるとそこの、時間を生<br>み出すのがやっぱり難しい」   | 「やっぱ仕事はしっかりしないといけないという思いはあるので、でもテどもなんでね。<br>やっぱり、競化をういうのは既になります<br>ねすごい、出てしまったときに早く帰らないと<br>いけないとか、そういうときとうしょうかな<br>あっていうのは、やっぱり、気がかりなので」   | いうか…っていうのを感じます」「仕事も中途<br>半端だし、家に帰って家事も、子さもの世話<br>もまあちょっと時間に追われながら、ゆっくり<br>子どもと検する時間も、持ちにくかったりして<br>どっちも中途半点だっていく気持ちとかも<br>あって」「休力面ではちょっとまあ大変さはあ<br>るかもしれないですね」   | 「通動」「通動もっと短かったら楽やなって思いますね。働く時間はしゃあないと思うんい、とごを辨れるんかなって思ったら、通動かな」「家におる時間が長くなればいいかなと」   | 「両方続けていくかほんとに年末年始悩んだ」「家族とか家ができゃくちゃになると、なんのために働いてるのかわかんななるんですよね。家が「番大事なんだなってのが、思うので、家族を犠牲にしてまで働かないライン探しですかね」   | 「それぞれ中途半端になってないかなあっていうところは思います」「仕事に重きを置い、 ・生活をしてるのはやっぱ前度いなて代<br>自身、家庭の中は奥さん中心でやってねっ<br>・たりますっていうので僕はしかり外で<br>お仕事して、ちゃんと持って帰ってくるもの<br>やづけれども、まめ完全に分前はできないの<br>でね、その辺で、なんかちょっと寒った。<br>ためるでは、なんかちょっと寒っま。<br>ためるでは、なんかちょっと寒。<br>まあでも仕事でも、やっぱいこう寒のことでん<br>かったりまかでいる。<br>なんでしまかられいまな。<br>なんでいるとない。<br>なんでいるとない。<br>なんからないできない。<br>なんがよっとない。<br>なんがまってるとが多い。なって<br>なんでしまからない。<br>なんがあったってき。<br>なんがもない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>ない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんがない。<br>なんない。<br>なんない。<br>なんない。<br>なんない。<br>なんない。<br>なんない。<br>なんない。<br>なんない。<br>ないいないないないないないないないないないないないないないないないないないな |
|   | 「上町とかもそこは分かってくれてるんで、話<br>してっていうとき、で帰らしてもらったりとかっ<br>ていうのはしてます」   |  | rt-tacのように対処しているか。  「うーん特には、そう思ってるだけで、代わりに何かしてるっていう感じはないかな」「漠然とそう思ってる感じ」   | 間とかが、も、なかなか設けれてないんです  |  |
| 子育てに役立ってるっていうのはとっても.<br>多分にあると思います」「子どもができて1番   | 「子どもとの世界ばっかりだとちょっとしんど<br>いなってのが大きかったので I ある程度の<br>距離感がある方が私はやいやすい方だった<br>と思うので、仕事行ってるときは仕事だし、<br>家庭は家庭だし、家庭だけ、とかになってし<br>まうと、ある意味ちょっと節になりすぎて私は<br>ちょっともうしんどい方なので、 距離感があっ<br>ていいのかなとは思います」 | 世事と家庭の両立をしていて、よ<br>「家で子どものことと家事はつかりやつてると<br>それはそれでちょっとしんどいんですけど<br>日中は外に出て仕事に行っていうので、子<br>どもとも距離が取れますし、まあ育思の息抜<br>きないですけど、で仕事に行けるつてい<br>うのがいいなって思いますし、仕事で優れて<br>も家に帰ったらまあ子どもとちょっと触れる<br>不ご憶されたどかして、家のことやると仕<br>事のリフレッシュにもなるっていうのがまめ<br>いいかなると思います「仕事を発きし両方   | 「子育てを経験することで、今、仕事してるメ<br>ンバーを選えたときに、子育てしてる方もたく<br>さんいらつしゃので、同じ立場になれた<br>なっていらのはまかったなって思いますね」<br>「いろんな人と関わって、いろんな話聞くの   | 「保育園に行ってる時間で子どもにとってす<br>ごいプラスなことだと思ってで、人間関係と<br>かいろんななんか遊びとかで、すごい物賞を<br>受けるので、子どもにとってもずごい教育画<br>ではいいなと思うし、私にとって社会に参<br>加できてるっていうところで、まあなんか責<br>級してる感とか、収入を得て、まあなんから<br>報が出るっていうところもプラスですし、自分<br>中野が付るんだって思える。自信じゃない<br>ですけど、そういうところもいいなと思いま<br>す」 | 「依存できるというかね。まあ言ったらく質問とかでもあった。家庭でやなことあった。<br>おう仕事に依存ですね。もう忘れるように、したりとか、職場でやなことあった。うま族<br>に泣きついて、こんなんあった一言うて、あ<br>人本言かっ人付ども、でもそうやってこう。自<br>分の居場所がいくつかあるっていうのは、す<br>ごい良くって」「それぞれいろんな場所があ<br>たり考え方切り軽えれたりとか、するっていら<br>のは、ずごい有関いなっていうのがね、仕事のね」<br>は原動力になるっていうのがね、仕事のね」  |

ることを考えると、個々の背景に沿って考える必要があると思われる。

続いてインタビュー調査の結果を示す。調査対 象者全員に共通する質問とその回答を表2に示す。 インタビューにおいては、「仕事が8、9で家庭 が1くらい(ID1)」,「(夫が仕事から帰ってくる のは)ほぼほぼ9時は絶対超える。(中略)9時10 時になってくると(子どもが)もう寝てるから (ID2)」,「夫は仕事で忙しくて (ID3)」,「(自分自 身が) 仕事に重きを置いて, 生活してるのはやっ ぱ間違いなくて(ID6)」, といった夫の就労時間 が長く, 仕事中心に生活を送っていることを示唆 する語りが多くの対象者から得られた。また、「主 人が、基本(家事を)手伝ってくれはしないので (ID2)」「(家事や育児の比率は)平日だったら私 がほぼ、8、8くらいですかね(ID3)」といった、 家事や育児を妻が中心として行っていることを示 唆する語りが得られた。内閣府(2018)におい ては、30代、40代男性では週の就労時間が60時 間以上である割合が約15%と他と比べ高く,6歳 未満の子どもを持つ夫婦の家事・育児関連時間は 妻では454分に対し夫では83分とかなり短いこ とが示されている。本調査においても同様に、男

そして、「家にいる時間が最近少し増えてるから、 奥さんの仕事をね、家事とか見てるけど(ID1)」、 「奥さんは、(家事は)本来自分がすることって思っ てくれてて(ID6)」、「家族とか家がぐちゃぐちゃ になると、なんのために働いてるのかわかんなく なるんですよね。家族が1番大事なんだなって (ID5)」というように、妻、夫それぞれが「夫は 仕事、妻は家庭」という伝統的性役割観のような 考えを持っていることがうかがえた。男性は仕事 が忙しく、家庭に時間を割けないという物理的な 要因とともに、それぞれが持つ性別役割分担への 考えという心理的な要因もあるのではないかと考 えられた。石(2015)によると、フルタイム就 労をしている母親において、父親の平等なジェン ダー観が母親が認識する仕事から家庭へのネガ

性は仕事中心、女性は家庭中心に生活を送ってい

るということが示された。

ティブ・スピルオーバーを減らし母親の育児不安とGHQを低減することが示されている。このように、配偶者、本人の性役割観によって精神的健康にも影響があると思われるため、それぞれが持っている考えにも焦点を当てることが必要であると思われた。

また、家庭での楽しさ・やりがいについての質 問に対し、男性では「子どもたちと一緒に過ごせ るのはとても幸せ(ID1)」,「見てるだけで楽しい (中略) 一緒におれたらそれでええかな (ID4)」, 「楽しいよね、家おんの(中略)おるだけで安心 するし, 話聞いてるだけで幸せやなあと思うし (ID6)」といった子どもや家族といること自体が 楽しく、幸せなことであるという意見が目立った。 女性では、「子どもにやっぱり、いろいろと成長し てできるとことかが増えてきたりとか(ID2)」, 「ちょっと会話して楽しんだりとか(中略)いろ んな会話ができるようになったりすると、まあ成 長を感じますし(ID3)」,「自分も成長できるし, 子どもの変化も見れて嬉しい(ID5)」といった 子どもの成長にやりがいを見出す発言が多く見ら れた。これは、女性のほうが子どもと過ごす時間 が多く、子どもの教育やしつけを担っているため にみられる意見なのではないかと考えられた。ま た女性では、「子どもとの世界ばっかりだとちょっ としんどい(ID1)」、「家で子どものことと家事 ばっかりやってるとそれはそれでちょっとしんど い(ID3)」といった、子どもと長く過ごすこと へのネガティブな意見がみられた。初塚・石田 (1998) では母親では父親と比べ育児関連ストレ スが高い傾向にあることが示されており、育児期 の母親では、家庭に重きを置いて生活することで 子どもの成長に喜びを感じる一方、育児によるス トレスも多く感じていると思われる。男性では子 どもと過ごす時間が限られているため過ごすこと 自体が楽しい、と感じているが、女性では子ども と過ごす時間が長く, 教育を担っていることで, 子育てによるストレスを感じやすいのではないだ ろうか。また佐藤(2013)では母親において、 子ども・子育てへの肯定感とストレスに負の相関

があることが示されており、育児ストレスを感じるとともに子どもや子育てへの肯定感を持ちにくくなることが予想される。育児や家事の多くを女性が担うことで、子どもの育ちに対してより敏感になり、ストレスを感じる母親も多いのではないかと考えられた。

今回、複数の対象者から「(妻が行った家事に 対して) 旦那が感謝をしてくれないときはすごく 嫌だなあと思います(ID2)」、「夫はありがとうと は言ってくれるんですけど、(中略) 気遣いみたい なのが、やっぱり多少は(中略)減ってるという か少ない感じ(中略)夫は結構その,鈍いという か気づかないので、言ってほしいなっていうとこ ろもスルーされたりとかするので(ID3)」,「奥さ んまだ(自分がした家事に)感謝してくれるんで, そこまだ頑張れるかな。これが当たり前になって きたら結構しんどいやろうなあ(ID6)」、「家事の やりがいは奥さんの感謝(ID6)」といった感謝 についての発言が得られた。ここから、妻・夫と もに家事への感謝があることが家事へのモチベー ションにつながるのではないかと考えられる。感 謝の多さにより家庭で感じるネガティブな感情と いうのは軽減されるのではないだろうか。これは、 特に家庭に重きを置いて生活する女性に顕著であ ることが予想される。先行研究では夫の仕事の多 忙さが妻の幸福感の低下につながる可能性が示唆 されているが (伊藤・相良・池田, 2006), 夫の 仕事が多忙であっても感謝があることで妻の幸福 感が高められる可能性もあると考えられた。

男性においても家事への感謝の語りはみられたが、家事の大半を妻が担っている家庭がほとんどであるということを踏まえると、同様の傾向を見出すのは難しいことが予想される。しかし、佐藤(2013)によると、育児期の母親において夫婦関係がよいほど子育てへの否定感が低く、父親においては夫婦関係がよいほど育児に参与する傾向があると示されている。また、成瀬・有本ら(2009)は、親の育児を進める支援として、父親が家庭と仕事の役割を両立することを肯定的に捉えることができるような働きかけが有効であると述べてい

る。これを踏まえると、家事・育児への感謝があることで、夫婦関係が良くなったり、家庭と仕事の両立を肯定的に捉えたりすることで、父親では家事・育児の時間が増加することが考えられる。今後、育児期の父母における仕事と家庭の両立について考えるにあたり、互いへの感謝というのが鍵と成り得る可能性が示唆された。

以上のように本研究から、男性では仕事、女性では家庭に重きを置いて生活していること、短時間勤務をしている女性において、家庭でのネガティブな状況を仕事で埋め合わせる傾向があることが示された。また、家庭での感謝についての言及から、家庭で配偶者から受ける感謝が、育児期の父母における家庭と仕事の両立において鍵となる可能性が示唆された。

しかし、本研究の限界として、対象者が6名と限られていることが挙げられる。そのため、この結果が本研究の対象者に限られたものでなく、育児期の父母全体に当てはまることであるかについては、今後調査が必要だと思われる。

## 斜辞

論文作成におきましては、兵庫教育大学池田浩 之先生にご指導いただきました。心より感謝申し 上げます。並びに、調査の依頼を受けてくださっ た6名の皆様、研究にご協力いただきました皆様 に深謝いたします。

## 引用文献

福丸由佳(2000). 共働き世帯の夫婦における多 重役割と抑うつ度との関連, 家族心理学研究, 14. 151-162

福丸由佳 (2001). 乳幼児を持つ父母における多 重役割と抑うつ度との関連を示すモデルの検討, お茶の水女子大学人間文化論業, 11-22

福丸由佳・小泉智恵(2003). 乳幼児をもつ父母 の多重役割と抑うつ度との関連 補償モデルと 分離モデルからの検討,心理臨床学研究,21, 416-421

福丸由佳・無藤隆・飯長喜一郎(1999). 乳児期

- の子どもを持つ親における仕事観,子ども観: 父親の育児参加との関連,発達心理学研究, 10,3,189-198
- 福丸由佳・中山美由紀・小泉智恵・無藤隆 (2006). 妊娠期の妻をもつ夫の仕事役割の状況と妻への サポートとの関連, 母性衛生, 47, 180-189
- 初塚眞喜子・石田雅人(1996).子育てにおける 母親と父親のストレス比較一母親の就労形態に よる差異一,大阪教育大学紀要,第IV部門, 45,1,31-42
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子(2006). 職業生活が中年期夫婦の関係満足度と主観的幸福感に及ぼす影響:妻の就労形態別にみたクロスオーバーの検討,発達心理学研究,17,62-72
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 (2003). 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検 討、心理学研究、74、3、276-281
- 黒澤泰(2011). 共働き夫婦におけるスピルオーバーとコーピング―夫婦を分析単位とした視点から一,応用心理学研究,37,29-39
- 小堀彩子 (2010). 子どもを持つ共働き夫婦におけるワーク・ファミリー・コンフリクト調整過程, 心理学研究, 81, 193-200
- 小泉智恵・菅原ますみ・北村俊則(2001). 児童を持つ共働き夫婦における仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバー: 抑うつ, 夫婦関係,子育てストレスに及ぼす影響,精神保健研究,47,65-75
- 小泉智恵・福丸由佳・中山美由紀・無藤隆 (2007). 妊娠期の女性の働き方と心理的健康,お茶の水 女子大学子ども発達教育研究センター紀要,4, 1-13
- 久保桂子(2012). 共働き夫婦における子どもの 病気時の育児への対処, 千葉大学教育学部研究 紀要, 60, 407-412
- 内閣府(2012). 平成23年度国民生活選好度調查
- 内閣府(2017). 男女共同参画白書 平成29年 度版 第3章 仕事と生活の調和(ワーク・ラ イフ・バランス)第1節 仕事と生活の調和

内閣府(2018). 男女共同参画白書 平成30年

(ワーク・ライフ・バランス) をめぐる状況

- 度版 第3章 仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス) 第1節 仕事と生活の調和 (ワーク・ライフ・バランス) をめぐる状況
- 成瀬昴・有本梓・渡井いずみ・村嶋幸代(2009). 父親の育児支援行動に関連する要因の分析,日 本公衛誌,56,6,402-410
- 佐藤淑子 (2013). 育児期家族の生活と心理,鎌 倉女子大学紀要, 20, 1-10
- 大坊郁夫・中川泰(1985, 1996). GHQ精神健 康調査票(30項目)
- 石曉玲(2015). ジェンダー観からみた育児期の働く母親の家庭・仕事役割間のスピルオーバーおよびディストレス,家族心理学研究,29,99-113

27

Relation of family and work for parents with preschool children -Through interview investigation-

Lina Ito\*, Hiroyuki Ikeda\*\*

\*Hyogo University of Teacher Education

\*\*Center for Research on Human Development and Clinical Psychology

In this study, we focused on the positive influence from roles played in the family and the work of parents during child-rearing periods and aimed to clarify the qualitative situation, with six employees who have pre-school children and the work (3 males, 3 females: average age 34.0 years old), and conducted the questionnaire survey and interview investigation.

We examined the concepts of work, "the spillover" of multiple roles of the work and the family, the General Health Questionnaire (GHQ30), subjective well-being and conducted an interview investigation on the rewarding and difficulties of the work and the family. As a result, it was shown that men emphasize work, while women emphasize family. In women who work for a short time, scores high on negative spillover from family to work, and compensation from work to family, it was shown that they tend to compensate for negative situations at home with the work. Furthermore, it was suggested that appreciation received from the spouse at home is likely to be a key in compatibility of family and work for child-rearing parents.

Key Words: spillover, compensation, child rearing period, subjective well-being